https://rodosoken.com/

ろうか。深刻な失業問題の拡大という事態にタイムリーにこたえる視点からは、公共工事の雇用効果を高める可能性、失業対策として効果を発揮する可能性を追及する公共事業改革は、ますます必要性を増していないのであろうか。そのような方策さえも「公共事業で雇用が確保できる分、地元産業の崩壊が進みやすい」(P166)として退けられるのであろうか。

原稿依頼者の要請を超えて、刺激的な本書であるがゆえに率直な感想を述べた。いずれにしても切迫した国民的な課題にかかわる、一読の価値ある著作であることは言うまでもない。

(しいな　こう・理事・北海道大学助教授)

(新日本出版社・2001年11月刊・1800円)

マイケル・ケーザー著　日野秀逸訳

『ソ連・東欧の保健・医療』
ー在モスクワ英国大使館勤務を経験した統計学者による客観的比較研究ー

柴田　嘉彦

本訳書の原著は、1976年にロンドンで発表された当時、在モスクワ英国大使館勤務を経験した統計学者マイケル・ケーザーによるソ連、東欧の保健・医療に関しての客観的比較の研究をまとめた特異な書籍である。当時まだ、いわゆる「社会主義国」といわれたソ連・東欧諸国の保健・医療に関するまとまった文献はなく入手も困難であった。この原著は、ソ連と東欧の6ヵ国、計7ヵ国について保健・医療に関してまとめた内容である。具体的には、当時のソ連をはじめ、ブルガリア人民共和国、チェコスロバキア社会主義共和国、ドイツ民主共和国、ハンガリー人民共和国、ポーランド人民共和国、ルーマニア社会主義共和国、の7ヵ国である。各国について、法制と政策、人口動向、健康状態、保健事業行政、保健医療施設、保健財政に分けてまとめられている。このように多くの国について、ほぼ同一の基準によってまとめた文献はなかったといってよく、その内容があきらかにされた意義は大きい。いわゆる旧社会主義国での保健・医療は資本主義国と比べ多くの点で優れているとはいわれながらも、その実態についての資料はなかった。数字だけでなく全般的に、歴史的に明らかにされたことは画期的なことである、研究に大きな役割を果たすことはいうまでもない。訳者が、あとがきに「本書は統計学を専門としソ連邦のイギリス大使館勤務経験を持つマイケル・ケーザーが統計情報と報道情報とインタビュー情報を駆使してソ連邦・東欧の保健・医療を分析した労作である」と記した評価に私も同感である。ケーザー自身、謝辞の中で、「東西両陣営のいずれにも保健サービスに見られる広範かつ相異なる機構を扱った出版物は殆どない」と述べ、本書の目的を「東欧の7ヵ国で現在行われている保健サービスに関する包括的な概観を提供しようとするものである」、このため著者は不十分な公式資料を多くの文書調査と当該諸国の人々との個人的コミュニケーションによって補わなければならなかった」と述べている。まさに、これだけ包括的な保健・医療に関して具体的に明らかにした書物は私も残念ながら今までお目にかかったことがない。それほど貴重な文献であるということができる。

(本の泉社・2001年7月刊・6000円)

(しばた　よしひこ・会員・日本福祉大学名誉教授)